

地理の授業のコトはじめ

前全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫



はじめに

社会科の先生方の会合で、「歴史や公民の授業は何とか指導できるが地理の授業はどれも苦手である」ということをよく耳にします。とくにここ数年で新規採用の先生方が増えて、この類の言葉がしばしば聞かれるようになりました。東京都の高等学校では、地理の授業を履修する生徒が減少して、地理の学習は中学校でおしまいという心配な傾向が見られます。それだけに中学校における地理の授業は重要であり、生徒にとって有意義で楽しい授業をしてほしいという老婆心からこのコーナーを設けていただきました。今後3回にわたって、地理の授業の基本的な進め方、学習指導要領改訂のポイントとなった世界地誌学習、日本地誌学習の展開の仕方等について、若い先生方を対象として進めてまいります。

その一、地理の授業とは

一般的に、中学校時代の地理の授業の思い出は？と尋ねると、都道府県名、国名を覚え（させられ）たとか、どこに何があるか、どこでどんな産物がとれるかなどを覚え（させられ）たというお話をいただきます。いわゆる物産地理、暗記中心の地理の授業としての思い出が残っているようです。その時に得た知識が無駄であるなどと、知識そのものを否定するわけではありませんが、これが本当に

地理の授業といえるでしょうか。

そもそも地理学習のねらいを一言でいうと「地域の特色を明らかにする」ことであり、「地域の諸事象を地理的な見方・考え方で総合的に解釈する学習である」といえます。中学校・高等学校で学習する地理の内容は、これまで地理学の学問的成果を受けて構成されてきました。その地理学は大きく区分すると地誌学と系統地理学に二分され、戦後の地理学習としては、中学校では地誌学習、高等学校では系統地理学習が主流とされてきました。



ポイント

地理の授業とは、
地域の特色を明らかにすること

その二、地理的見方・考え方とは

地理学習では、地域の特色を明らかにするために地理的考察＝地理的見方・考え方の育成が重要です。地理的見方・考え方とは、学習指導要領解説における表現に従うと以下のように示されます。

○地理的見方

どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえ、地理的事象として見いだすこと。また、そうした地理的事象にはどのような空間的な規則性や傾向性が見られるのか、地理的事象を距離や空間的な配置に留意してとらえること。

○地理的考え方

そうした地理的事象がなぜそこでそのように見ら

れるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか、地理的事象やその空間的な配置、秩序などを成り立たせている背景や要因を、地域という枠組みの中で、地域の環境条件や他地域との結び付きなどと人間の営みとのかわりに着目して追究し、とらえること。

○地理的思考方を構成する柱

・そうした地理的事象は、そこでしかみられないのか、他の地域にもみられるのか、諸地域を比較し関連付けて、地域的特色を一般的な共通性と地方的特殊性の視点から追究し、とらえること。

・そうした地理的事象がみられるところは、どのようなより大きな地域に属し含まれているのか、逆にどのようなより小さな地域から構成されているのか、大小様々な地域が部分と全体とを構成する関係で重層的になっていることを踏まえて地域的特色をとらえ、考えること。

・そのような地理的事象はその地域でいつごろからみられたのか、これから先もみられるのか、地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像について考えること。
(※下線は筆者)

このように地理的事象を位置や広がり（分布）からとらえ、その背景や要因を自然環境や社会的条件から、また、他地域との結びつきや人々の営みにも着目しながら考えること、そして地域の変容や課題・将来像の面から地域的特色をとらえることが、地理の学習といえます。What（何が）、Why（なぜ）、How（どのように）、When（いつから）の問いかけが学習に必要なのです。

その三、 基本的知識・技能の定着と作業

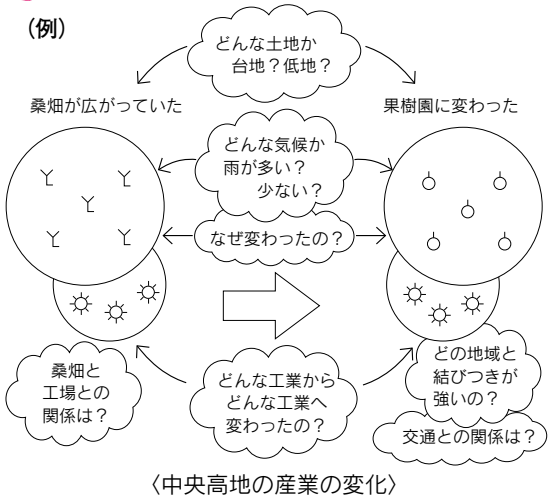
地理の学習には地理的見方・考え方が重要ですが、その基盤となる基本的知識・技能が必要です。これまで地理は暗記科目だ、物産地理だと批判されてきましたが、1960年代の私の中高生時代を振り返ると、国名とその位置や産物は今でも頭に残っていますし、雨温

図・ハイサーグラフの作成や白地図への着色作業、先生の板書を写して略地図を描く作業は、知識や技能の定着を支えるまさに地理の授業として記憶に残っています。今次改訂された学習指導要領の世界と日本の初発の単元である「地域構成」の学習では、世界や日本を大観し、位置関係や基本的な知識・技能を身につける学習となっているので、ていねいにわかりやすく教え、かつ先生方自身楽しんでほしいと思います。



ポイント

地理の学習に必要な視点



その四、 地理的技能とは

地理的技能には大きく分けて二つあります。一つは、地理的事象が読み取れたり地域的特色に結びつく事象を見いだしたりすることができる資料、難しい言葉で「地理情報」の活用に関する技能です。二つ目は、地図の活用に関する技能です。

一つ目の地理情報とは、いわゆる写真や映像、雨温図などのグラフ、統計資料、文章資料などであり、そこから地理的事象を読み取ることが主要な技能です。生徒に読み取らせるためには、とくに1学年の地理学習の最初

の時点では、読み取るための視点を与えることや初歩的なアドバイスが必要です。例えば、グラフの場合、「何を示しているグラフか」、「出典は」、「縦軸と横軸の目盛りは何を示しているか」、「グラフの変化はどうなっているか、なぜそうなるのか」などの問いかけを繰り返すことによってグラフの見方が育成され、やがては問いかけがなくてもグラフから地理的事象とその背景を自ら読み取るようになるでしょう。

写真の読み取りについては、『社会科 中学生の地理』のp.21に詳しく説明されています。写真に写っている景観から自然や衣服、食事、住居の注目するポイントに従って地理的事象を読み取ることができます。その他、写真によっては写っている物や風景、人々のようすからも読み取ることができます。先生方もほかの写真から読み取ってみてください。

二つ目の地図の活用についての技能は、地図の読み取りと、表現としての地図化の2種類の技能があります。地図及び地図帳の活用として、まず地図や地図帳に慣れ親しんで、学習や日常生活の中で出てきた地名や国名の位置を自主的に探すことがあげられます。新教育課程になって小学校の段階で地図帳の索引の活用は進んでいますので、中学校入学時に実態を把握しておきましょう。

○先生も地図をつくる、グラフをつくる

地理的技能は読み取りだけではなく、地域的特色を表現する一つの方法として、地図化したり収集した統計資料からグラフをつくったりする技能も含まれます。生徒に調べたことの成果を地図化したりグラフ化したりしてまとめることを求めますが、先生自身も地形図から断面図や土地利用図を書いてみたり、雨温図や人口ピラミッドをつくってみたりすることで生徒の目線に立って気づくことがあ

るはずです。

○方位やデータの実感をつかむ

先生方は自宅や勤務地以外の土地を歩いているときに「自分は今どの方角に向かって歩いているか」を考えたことがありますか。「今現在の気温は何度ぐらいだろうか」を感じ取ったことはありますか。「学校の敷地面積はおよそ何haか。学校を中心として1kmほどの範囲までか」、「学校の周辺の人口密度はどの程度か」などの問いかけは、地図や地理の学習でよく出てくるデータを、目に見えるもの実感できるものと理解させるために、先生方自身が把握しておくべき技能といえます。

○計画的に地理的技能を育成する

上記のような地理情報を読み取ったり作図したりする技能、地図を読み取ったり地図化する技能は、一度やればよいというものではありません。基本的知識の定着と同様に、折に触れて繰り返し行う必要があります。生徒の技能の定着の度合いを測りながら柔軟に活動を組み入れることが必要ですが、いつかできるとかいつでもできるなどと思っていると、結局やらずに終わってしまい、生徒に技能が身についていない結果となります。やはり意図的計画的にどの単元どの時間でどの技能を身につけるさせるかという指導計画を立てることが重要です。



ポイント

地理的技能では

- ①地理的事象の読み取り
- ②地図の読み取り、地図の作成が必要

その五、2年間の指導計画を立てよう

歴史的分野の授業は歴史の流れを系統的に扱うので、ある程度見通しをもって、1学期

は〇〇の時代まで、1学年最後までに〇〇の時代まで終わらせられれば・・・と計画を立てられます。しかし地理の授業では、世界も日本も地域を区切って学習し、内容も必ずしも系統的ではなく、細切れの学習を繰り返すイメージで流れをつかみにくく、計画が立てにくいとよくいわれます。この章では、地理的分野の2年間の指導計画の立て方について考えていきましょう。

○世界と日本の二本立て

中学校における地理の学習は、2年間で世界と日本の学習を120時間で行います。大きくとらえると右表のように1学年で世界について、2学年で日本についての学習を行います。大まかな流れで見ると、①世界も日本も大まかな位置や枠組みをとらえる地域構成→②州や地方ごとの地誌学習→③調べ方・学び方を学ぶ地域調査と3部構成になっています。歴史的分野の学習(130時間)を3学年で40時間履修するとして、残り90時間を学校によっては、地理と歴史の1・2学年での配分を以下のように考えられます。

(例1)

1学年	地理 75	歴史 30
2学年	地理 45	歴史 60

(例2)

1学年	地理 50	歴史 55
2学年	地理 70	歴史 35

やや極端な例ですが、地理の学習を1学年あるいは2学年のどちらで多く時間を取るかで右の表の配分も変わります。日本地誌の学習や身近な地域の調査の学習において、地理的見方・考え方や社会参画の視点の学習を重視するなら(例2)の配分が考えられます。右記の指導計画は、(例2)の配分に近い例といえます。

大まかな2年間の指導計画が立てられた後、

中単元や世界の各州・日本の7地方の時数を再検討する必要があります。世界や日本の地域構成を学習する際には、地図やグラフの読み取り等、地理的技能を身につける学習を重視する観点から、時数を多く取る必要があります。また、世界の各州や日本の地方の学習の際には、どの州も地方もほぼ同じ時数で同じようなりズム・内容で学習を繰り返すのでは、かつての網羅的・羅列的な学習に陥ってしまいます。

【地理的分野の大まかな指導計画】

(3学期制の例)

第1部 世界のさまざまな地域(1学年)

[1学期] 1章 世界の姿(8時間)

2章 世界各地の人々の生活と環境(8時間)

[2学期] 3章 世界の諸地域(19時間)

[3学期] 世界の諸地域(7時間)

4章 世界のさまざまな地域の調査(4時間)

第2部 日本のさまざまな地域(2学年)

[1学期] 1章 日本の姿(5時間)

2章 世界と比べた日本の地域的特色(16時間)

[2学期] 3章 日本の諸地域(20時間)

[3学期] 日本の諸地域(14時間)

4章 身近な地域の調査(8時間)

※実質的な時数として行事等の時数を勘案し、合計は120時間になりません。

この時間では、地図の読み取りを、この時間ではグラフの読み取りを、この時間では知識・概念の定着を図る、この時間では思考・表現の活動を取り入れた学習活動を、というように内容的にメリハリを、時数的に軽重をつけた指導計画を考えることが大切です。

◎次の2学期号では、世界地誌の授業のポイントについてお話しします。